

入れて

背戸に立つのは 忍びの男 お腕持たずに 色乞食
八時三十分の 夜学の戻り おれのあんまら その中
に

その二

あんまどいがじゃ 待つ夜さ来んと 待たぬ夜さ

来て 門に立つ

娘口説くな 機さえ織れりや 何処で身過ぎを

しようのままよ

嫁御かわいや 何時来て見ても たすき投げ置く

暇もない

想うて来たかよ 思わず来たか 私は裏から

思うて 来た

姑どんど神 小姑地神 嫁は五月の しょぼく

さめ

背戸にござんすは 殿さじゃないか 嵐目の毒

こちござんせ

一期末代居ろうよに 思うて 背戸に五葉松

植え置いた

唄は声より こなしが大事 同じ器量より 気

が大事

その三

おれの殿さは 北海道にござる 身欠け練取りし

てござる

・・・男と 早稲田の稲は 見かけ良くても

性が悪い

踊るも跳ねるも 今夜ばかり 明日は田んぼへ

稲刈に

ござれや月夜 ござらにや闇じゃ ござれや月夜

の 真ん中じゃ

親の意見と 茄子の花は 千にひとつの 徒が

ない